

一枚の皿の物語

徳山 望月 一徳

令和7年の夏は、終戦の年から80年の節目です。先の太平洋戦争の慰靈行事（広島では原爆慰靈祭）が、被団協のノーベル賞受賞（2024）で勢いがつき猛暑のなかで盛大に執り行われました。

広島に生まれ、育ち、暮らしていたもので身内に被爆の犠牲になったものが居ないという人は皆無です。両親兄弟がなくなり、たった一人取り残されたという人（高校の同級生にいた）さえいます。私も兄（次兄・昭7生・15歳）を失いました。だから式典には出席はしなくとも、その日その時間★1になるとTVの前に座るのが常です。聴けば、三男（昭10生・平30年没）の兄は、毎年式典に出席していたといいます。ちっとも知らなかったなあ—彼は、原爆死の兄に特別に可愛がっていました（兄弟でも相性がありますね）。名前も死んだ兄は、“誠”で三男は“實”。合わせて「誠實」とセットになっていると気づいたのは80歳以降のことです。★1) 8月6日午前8時15分

あんな愚かな戦争さえなければ、兄弟みんなが天寿を全うできて子々孫々へと命のリレーがあつたはずなのに、と残念でなりません。これも運命と言うしかありませんが、我が家に戦前からある一枚の皿(写真①)に託して当時の広島を振り返ってみます。

昭和19年春、本川小学校へ入学——爆心地に最も近い小学校です。登校は、上級生に連れられて整列して校門をくぐりました。校庭の正面にコンクリート製の小屋ほどの国旗掲揚台があり中には天皇陛下と皇后陛下の写真がありました。朝礼は学年順に並んで校長先生の挨拶を聞きまし

た。当時の上級生（6年生）は、しっかりしていました。文章もこれが小6の子どもが書いた文章かというほどの出来栄えです。左翼人間に言わせると、天皇陛下崇拜、全体主義、家族主義は、戦争になる危険が大きいと言うのですがね。本当にですかね？！

近年、人を殺して自分も死にたい（死刑になりたい）というのが、増えましたね。個人の自由と権利のはき違えが、ノビノビ育ってほしいの結末のように思いますけど・。ノビノビ殺されても、たまりません。



写真①

閑話休題・川を挟んで東正面に原爆ドーム（当時は産業奨励館）が見えます。我が家は、本川に架かる相生橋（橋の中央からの中洲に橋が架かっているメズラシイ型）の西麓で、現在は河川の緑地帯で川に沿ったギリギリにありました。家から覗けばすぐ下が川です。そんな川沿いに隣近所があるわけもなく道を隔てて西側に鷹匠町（城下町だから）がありました。

街中ですから、ガキ大将がいて子供たちを引き連れて遊ぶということではなく、母親の買い物について行くのが一番の楽しみでした。それが現在の平和記念公園（中島町）で、現在の様子からは想像ができかねますが、当時は大そう賑やかな繁華街でした。狭い道を人が行列して行き交う風景が蘇ります。店の前に置いてあるカラクリ箱を覗き込んで、漫画の動画（手動式）を楽しました。現在の広島の繁華街は、福屋百貨店を中心とした東寄りですが、当時の広島の繁華街は、この中島町と広極（ヒロゴク—原爆ドーム側・戦後はストリップ小屋で賑わった）の通りでした。

昭和30年代から被爆前のこの街（中島町）を再現する作業が進められていると新聞で知りましたが、爆心地の中心のせいで一瞬の内に、人も建物も破壊または蒸発（なんと残酷な）し、生き証人がいないことから再現は難しい作業になると報じられておりましたが、戦前の復元（誰が住んでいたか）地図は完成了はずです（中国新聞）。

当時（昭19～20）、空爆による市街地の延焼を予防するために全国で建物の間引きが行われ（サザエさんの漫画や向田邦子さんのエッセイにも残っている）、その労働力として学徒動員（勉強はそっちのけ）がありました。

その平和記念広場に県庁があり、その日その時間に兄の学年（2年生）の全生徒が駆り出されて（他校の生徒も含む）、被爆し全滅しました。

助かった人は、その日に限って偶然に病欠や遅刻した生徒たちで、自分だけが生き残ったことに申しわけない気持ちを長く持ち続けます（その気持ちは痛いほどわかります）。現在、90歳越で、被爆の悲惨さを後世に伝えている人たちは、紙一

重で生き残った人たち（94歳で原爆の生き証人として語り部をしている人を知っている）です。被爆死した兄の同級生の犠牲者一同は、現場の近くの慰靈碑に名が刻まれています—合掌。

一枚の皿（写真①）は、母親に連れられて広極の店で購入したものです。刻印に「丸市」（写真②）とあり現在も陶器を製造販売しているようです。戦前の品としては華やかな西洋皿に仕上がっていきます。5枚セットで永く使われ、母親が亡くなったのを機会に兄嫁に断って一枚だけ持ち帰った皿です。戦前を原爆ドームの直ぐ傍で過ごしたという生き証人（品）です。

詳しい事情を言えば、昭和19年、愈々戦況が危くなった頃、父親の判断（大本営があったから）で被爆ドームから100m地点の家から疎開——竹原へ（安芸ノ海やゴルフの岡本綾子の出身地の近く・当時は塩田とブドウの産地）。父親（会社が横川・原爆ドームから5キロ）と次男（昭7生）は、学校（二中—戦後は観音高校）の都合で広島に残ったのが運命の分かれ道になりました。



写真②

だからこの皿は、私たち親子（母と）と一緒に田舎に引っ越して被爆を免れたのです。運のいい西洋皿なんです。

因みに、引っ越した後に入居した家族は、家ごと相生橋を超えて原爆ドームの前の川まで飛んだと聞きました。この一枚の皿も5枚セットで被爆していたら、5枚が溶けてくっつき広島平和記念資料館に飾られたことでしょう。勿論、両親も私も灼熱で蒸発したに違いありません。



今年も原爆慰靈祭の日は、TVに向かって黙祷しました。会場には石破首相をはじめ政府の要人は勿論、各国からの代表者が参列したのは、例年のごとくでした。ところが被爆の記憶がなまなましい昭和20年代の原爆慰靈式典には、時の総理は出席せず長く代理人で済ませていました。

当時は生き残った人（一般市民）の生活の保障はおろか海外の残留日本人の帰国船を調達するのも困難を極める有りさまでした。被爆者たちも差別される始末で、あれだけの惨事を経験したものが、口をつぐんでよく辛抱したものだと、時の流れの移ろいに人の気持ちが良いも悪いも解（ほぐ）されていく過程をつぶさに観た80年間でした。

例年、広島市長を筆頭に献花をしてスピーチをしますが、平和の大しさを説くだけで、どれもこ

れも似たようなスピーチです。誰とは言いませんが、広島と長崎のスピーチが、酷似していました。

一年前の令和6年の広島の慰靈祭の子ども代表（男女2人）のスピーチの内、男の子が「祈るばかりでは、平和はやってきません」が、心に響きました。祈るのは、皇室の人たちにお願いするとして、どうしたら戦争をしないで済むかを考えることが肝要です。喧嘩の強い奴に殴りかかるバカはいません。

外交も背景に強いパワーがないと、よい交渉はできません—「大きな杖持ち穩やかに語れ」と言ったのは、日ロ戦争の講和条約会議（於ポーツマス）の仲介をしたテオドア・ルーズベルトです。因みにその時の外交官は、小村寿太郎（宮崎県飫肥藩出身）でした（150センチ足らず）。「ポーツマスの旗」を上梓した吉村昭氏によると、取材で現地に訪れた時、小村寿太郎が、チビだったという市民は誰一人としていなかった、と書いてあります。当時の日本が、世界に冠たる国だった証拠です。

かくして一枚の皿は、我が家の食卓にいまだに登場し、80余年の歳月を共にしております。ハイ！

令和7年10月16日 秋風が吹く頃に 望月一徳

